“ソボ” と再会したのは、高校の入学式のときだった。なにげなく隣のクラスの列に並んだ顔を眺めていて、懐かしい顔を見つけた。

「ソボ! あんた何やってんの?」

「うっそ! あんたこそ何やってんの?」

お互いににやにやして言った。

「落ちたね」

「落ちたよ」

ソボとは、中学2年生のときに塾をさぼって行った夏祭りで知り合った。音楽の趣味が共通していて、最初から妙に気が合った。レコードの貸し借りを約束して別れたものの、学校が違うせいもあって、その後は手紙をやりとりするくらいになっていた。

別の塾に通っていた彼女の志望校も知っていたから、まさか同じ高校になるとは思いもよらなかった。

「クサレ縁だねぇ」

久々の再会をふたりは喜び合った。

そのソボが、有希の停学が解けるのを待つようにして、バンドをやらないかと誘ってきた。

「手始めに文化祭でやろうと思うんだけどさ、有希、歌ってくんないかな」

不良仲間との遊びにへきえきしていた有希にとって、それは願ってもない申し出だった。

「やるやる!」

即決で返事をした。

高2の夏は、こうしてはじめてのバンド活動で過ぎていくことになる。

ミーンミーンミーン、ジジジジ……。

蝉が鳴く季節になれば、函館とはいえ暑い。夏休みで誰もいない教室の窓を開け放って、有希たち”アブノーマル”のメンバーはアンプから大音量で練習曲をかきならしていた。ソボがギターで有希はボーカル。ドラムとキーボードには、ブラスバンドをやっている子を勧誘した。誰もがバンドでやるのははじめてだったから、演奏のひどさはかなりのものだった。カラオケとは違う生音の大きさにも驚くくらいだった。

文化祭まであと2ヵ月足らず。

だらだらやっている暇はなかった。涼しい朝のうちから集まって毎日遅くまで特訓を積んだ。管理人のおじさんもなぜか協力してくれた

努力という言葉など大嫌いな有希だったが、バンドの練習はひたすら楽しかった。歌いすぎて喉がひりひりしてきても、まだまだ歌っていたかった。たとえ下手でもバンドはバンド。ギターがいて、ベースがいて、ドラムがいて、その真ん中で、自分が歌う。全員がひとつになってビートを作る。

ずっと、憧れだったのだ。

そのことをなぜだか忘れていて、ようやく思い出した気がしていた。ちょうど、大切にしていたガラス玉の指輪を失くして、どんなに探しても見つからず、そのうち指輪のことが記憶からなくなって、ひょんなときにポケットから出てきた、あの感じに似ていた。自分は忘れてしまっていても、それはいつもそばにあったのだ。

本当に夢中になれるものにめぐり合ったからか、単に夏バテのせいか、気がつくと有希の体重は40キロに戻っていた。

「ちょっと休憩しよっか」

仕切るのはソボだ。

マイクを床に置いて、有希もへたりこむ。

「ふえ～、あっちいよ～」

教壇の真ん前で大の字になると、見慣れているはずの教室がはじめて訪れた場所に思われた。

「ソボー」

「えー?」

ソボはソボで、椅子を並べて寝ころがっているらしい。スカートの裾をバタバタさせて、足に風を送り込んでいる音が聞こえる。

「私、今、不思議な気持ちだよ」

「どうして」

「教室がね、なんか素敵な場所に思えるんだ」

「へっ?」

「うん。学校なんて好きじゃないしさ、教室なんて居眠りするだけの場所だと思ってた。でもさ、なんかこうしてると、ここも悪いところじゃないって思えてきた」

ひと息あって、ソボが深呼吸するように言った。

「なんかわかる気がする。私もさ、黙ってたけどやっぱ志望校に落っこちたの、けっこうショックだったんだよね。1年生のときはずっと、こんな学校……って思ってた。でも、気分転換にバンドでもやるかって思って、それであんたと毎日会うようになって、ちょっと人生変わったよ。楽しいもん、なんだか」

「文化祭、盛り上がるといいなぁ」

「盛り上がるって、絶対に」

窓の外で、蝉の声がいちだんと大きくなった。

「さてと、もうひとがんばするか」

スカートの裾をひるがえして、有希は立ち上がった。

バカ受けだった。

拍手と喝采で体育館が波うった。

バンド・ブームの時世で、アブノーマルのコピーした曲のどれもがヒット曲だったせいもあるかもしれないが、それにしても予想をはるかに超える反応だった。

派手なビキニのステージ衣装は有希のアイデアで、「かわいー!」という声が、あちこちから上がった。ぶっつけ本番のMCは、なぜか笑いが取れた。

ブルーハーツの「リンダリンダ」も、プリンセス・プリンセスの「世界でいちばん熱い夏」も、大合唱が起こった。

講堂のステージの真ん中に立って、有希はほとんど破裂しそうに胸を高鳴らせていた。

(なんて楽しいんだろう……)

何十日も練習を積んだ成果が形となってそこにあった。それが何よりうれしかった。

アンコールの拍手は鳴りやまず、とうとう30曲を演奏するに至った。喉は涸れ、メイクはボロボロだったが、有希はこのまま永遠に歌いつづけることができるような、そんな気がしていた。

と、急にステージが真っ暗になった。

同時に耳障りな音がして、ギターの音もマイクの声もぷつりと途切れた。

時間をとっくに過ぎているのにやめないバンドに業を煮やした先生たちが、いきなり電源を抜いたのである。

「なんだよ～！」

「もっとやれ！」

突然の終演に場内はブーイングの嵐。だが、みんなでかけあってみても”規則”は動かなかった。

30分後。教室いっぱいにギターのディストーションが響いていた。有希は練習のときのように、教壇で歌っていた。

講堂を追い出されても興奮のおさまらない”観客”が、みんなでアンプやスピーカーを運び出すと、それを教室に運んでくれたのだった。

場所を移して、アブノーマルはまたも数十曲を演奏した。ライブハウスと化した教室は、最後には大合唱でギターの音も聞こえないほどだった。

「お疲れー!」

「とりあえず大成功!」

「かんぱーい!」

すべてが終わり、みんなが帰った後の教室に残り、買ってきたビールで祝杯を上げた。

有希は本当においしいと思える酒をはじめて味わった。